

## 第5回 小豆島町総合教育会議

### 【日時・場所】

○開催日時 平成27年11月27日（金） 午後1時半～午後3時

○開催場所 研修室

○出席者 塩田町長、後藤教育長、熊坂委員、岡田委員、黒木委員、岡本委員

○同席者 【町職員】

松本副町長、松尾副町長、空林総務部長、坂東教育部長、松田社会教育課長  
後藤子育ち共育課長、高橋教育指導室長、楠健康づくり福祉課長

【教育関係者】

岩澤小豆島高等学校校長、小玉小豆島中学校校長、片山池田小学校校長  
羽座星城小学校校長、三浦安田小学校校長、川井苗羽小学校校長  
中本安田幼稚園教頭

川口園長（旭・福田幼稚園、内海保育所橘・福田分園）

中多小豆島こどもセンター園長、増田小豆島こどもセンター所長、  
大岡内海保育所所長、慈氏草壁保育園園長

○傍聴者 7名

○事務局 4名

### 【内 容】

[塩田町長] 挨拶

第5回の小豆島町総合教育会議を開きます。今回と次回の総合教育会議では、町民の皆様から教育についてのご意見を伺うことにしている。今日は6名の方にご意見をいただく。6名の方に順番にお話しをしていただいで、教育委員の方からご質問をいただくことにする。

[佃豊年氏：教育における家庭と学校の役割分担について] 挨拶

私は学校と家庭の役割と連携ということでお話しをする。言うまでもないが、それぞれの役割の共通理解が必要でないかと思うが、まず「家庭」、「親」という立場から。「三つ子の魂百まで」とか「子は親の背を見て育つ」これは幼少期における家庭でのしつけ教育がいかに重要であるかという教訓の一つであると思うが、親は我が子を人として、常識ある社会人に育てる義務と責任があるという自覚がまず大事でなかろうかと思う。「親になるのは優しいが、親であることは難しい」と言われているように、親がしっかりとした生きる姿を見せること、まずは家庭の家族の一人一人がそれぞれの立場や権利を認め合い、尊敬しあう生活環境を作ることが大事でないかと思う。しかし、得てして子供の特性・長

所は理解できず、また理解しようとせず、親の一方的な判断だけで進学や就職、さらに結婚に関してまで強制するような言動がないであろうか。日頃から機会あるごとに家で色々と話し合っていることが大事でなかろうかと思っている。

それと、学歴だけが人生でないということだが、勉強は嫌い、不得意だが、スポーツは拔群な子もいる。反対に学問は好きだが、スポーツは苦手な子供もいるが、目指すべきは自分で考え、判断する人間の育成だとすれば、どの道を選ぼうが、あとは親や他人のせいにはせず、自己責任で精進・努力する人が望ましいと思っている。早坂茂三という人がいたが、「駕籠に乗る人担ぐ人そのまた草鞋を作る人」と言ったのもっともなことだと思う。すべての教育・しつけは教える立場と教えられる立場双方の信頼関係があってこそ、成立することだと思うので、家庭では子供の前で学校、特に受持ちの先生の悪口や批判は慎むべきだと思っている。親がそんな話をすれば、子は先生を信頼するはずはないのではないかと。学校や先生にも行き届かない事実もあるかと思うが、もっと他に色々な方法があるのではないかと、思うわけである。

次に学校、先生という立場から考えると、若い頃、石材関係で阪神方面まで手広く進出して成功している実業家の方が親しくしてくださって、機会あるごとに、「学校の先生は一般的にまじめなのはいいが、世間に疎い。先生以外に色々な職業の人と交流したら、学ぶことも多く、視野が広がる」と教えてくださっていたことが後々大変参考になり、役に立ったと思っている。先生も子供も親も人間としては同等であっても、学校では先生は教え、指導する立場であり、子供は教えられる立場だという区別が重要であると思っている。それだけの自信と敬意が必要でないかと思っている。最近報道されたような教育者として許されない言動は別として、良い行いは人前であっても褒めて、悪いことは注意し、諭すことを怠ったり、遠慮してはいけないと思う。親によっては、学校の先生に抗議を申し込む事例もあった。教え諭す「教諭」をバックアップする人や組織が必要ではないか。後で守ってくれる上司もいないというのであれば、そういうことを言いたくても、なかなか言えない、つまり、正常な子供の成長のためにより教育ができにくいと思っているからである。例として、学期末に通知表を渡す日、勤めていれば指定された時間に会社を休んで来たのに、欠点ばかり言われたとすれば、がっかりするのではないかと現職時代を反省して、職員には保護者と話しをするにはできるだけ、親も子も希望の持てる言葉づかいが大事だと、それが先生や学校への信頼につながるということを話したことがある。要するに、家庭も学校も子供を生かす一言もつぶす一言もあるという本もある。何でも満点主義というのは無気力な人間にする可能性が大変高いのではないかと、そう日頃思っている。

香川県の教育会が、昭和42年2月18日に発足し、小豆郡の教育会は昭和42年の9月13日に発足した。「教育島風」、今から40年前に、視野広く、スケールの大きな人間を目指してというタイトルを基に、島の良さを知り、知らせる子に育てる。社会性の育成。もう一つはやる気、意志力の育成。最後に想像性、思考力の育成ということで、事務局は教育委員会の小豆出張所、第1次は白い表紙、第2次は黒い表紙、第3次は青い表紙、これを社会教育関係者や公民館、学校に配布して、これを参考にして、島は一つというスケールの視野の広い人間を目指してやってきた。

そう意味では、ある適正な組織もいるのではないかと思っている。

[岡広美氏：これからの教育について思うこと] 挨拶

今の子供たちの抱えている問題の大きなところは従来であれば教育課程からそのまま就職できていたのが、社会参加に移行できなくなっているという移行期の問題。

「パワーレス状態、生きる意欲の低下」の状態に陥ると、どんなに頑張っても成績が伸びてこない。そして学習意欲が低下して、不登校が始まって、社会参加できなくなってくる、納税者になれなくなってくるということにつながっていくのが現状である。

一番怖いのが、「次世代への連鎖」というところである。一昨年「子どもの貧困対策法」ができたので、貧困で困っている子供たちがどのようにして高等教育を受けるか。力があるのに発揮できず、社会階層の底辺層に沈んでいく子供たちが現実的に見え始めているので、その子供たちをどう救っていくのかという大きな課題が私たち大人社会にあるのではないかと思う。

自己評価がとても低い子供が多い。やる気が起きてこない。生きる意力の低下にいる子供たち。頭脳明晰であったり、有名な大学を出ているにもかかわらず、コミュニケーションが苦手で、就職してもやめていく、転職を繰り返す子が増えている。「自己肯定感の醸成」とは「やればできる」「自分も役にたつんだ」という気持ちは小学校時代でないと築けない。教育課程の中で自分が活躍できる場というのをどう体感するのが大きな課題だと思う。

小豆島外の人が小豆島に来た時にどうやって一緒に生きていくのかということを作っていける、島の独自性をアピールできる人になっていくために、1人1人の良さを伸ばしていってもらいたい。そうすると先生方の勤務時間に見合った人数、予算ということに関わってくると思うが、経済的に恵まれない子供たちでもやればできる「フェアスタート」が将来の生活保護受給者を減らす予防対策になると思う。

[照下あけみ氏：道徳教育について] 挨拶

モラロジーの立場から道徳教育について述べる。

「モラロジー」は「道徳」を表す「モラル」と「学」を表す「ロジー」からなる学問名である。

さて、今、私は友人と2人で苗羽小学校、安田小学校、星城小学校にボランティアで論語の朗読に行っている。学校には毎月モラロジーの小雑誌「ニューモラル」をお届けしたり、「子から親へ送るエッセイ、親守詩」の募集に伺ったり、先生に対してはモラロジーの教育者研究会に参加してもらったりと何かとお世話になっているので、何かお返しができないかと思っていた時に出会ったのが論語の朗読であった。毎月1回20分程度の学校訪問ではなかなか学校やクラスの様子はわからないが、気づいたことを申し上げる。

会う先生方は「おはようございます。」と挨拶をしてくれるが、全体的に少し暗い印象である。朝は先生方はお忙しいことと思うが、外からの訪問者は事務的な挨拶と映ることもあるのではないか。もっと元気に明るく挨拶してくれるといいと思う。

いよいよ平成30年から道徳教育が特別の教科として実施される。道徳教育で最も大切

なことは、教師自身及び家庭の親も社会の指導者も率先垂範（人に先立って模範を示すこと）だと思ふ。そのよい例がある千葉の高校の卒業文集の中にあつたので、少し紹介したいと思ふ。その高校はモラロジー教育を取り入れた私立の高校だが、校長先生が毎日 JR の駅に立って、生徒を迎えることを10年以上も続けている。小豆島町でも各学校の校門の前で行われているが、この高校では挨拶をする先生方の心遣いを大変大切にしている。この高校の先生方の一番好きな言葉は「率先垂範」である。卒業文集の中で生徒は、校長先生の人柄もさることながら、先生方がその校長先生を大変敬っていることに気づき、自分も率先垂範してゴミ拾いを行うようになったと書いている。私はその先生も素晴らしいと思ふが、その先生の素晴らしさに気づいた生徒もまた素晴らしいと思ふ。このように道徳は校長先生から先生へ、先生から生徒へとつながっていく。また、家庭では親から子へ、子から孫へとつながっていく、「累代教育」が大切だと思ふ。そういう関係が続くと親孝行な子供ができるでしょう。

先日もテレビで「やさしい問題」というのをやっていた。これは問題が易しいのではなく、優しい思いやりの心を持った人、相手の気持ちを考える人なら解ける問題を出すという少し変わったテレビ番組である。例えば、高い塀で囲われた工事現場があり、中は見えなくなっているが、角の部分は透明になっている、これはなぜかという問題があり、答えは出合い頭の自損事故を防ぐためということであつた。私の家でも14、5年前に出会い頭の自損事故を防ぐため、庭の木をばっさり切つたことがある。ちょっとした心遣いである。

また、ある人から聞いた話であるが、この頃孫がやけに明るくなってどうしたのかなと思つていた。学校で祖父母参観があり行つてみたところ、担任の先生が非常に明るい先生で、先生の心遣いの影響は大きいのだなと思つた。

戦後の核家族になって、家庭教育力が落ちてきたと言われている。しかし、それを補うのが学校だと言つて、先生方に押し付けるのも大変だと思ふ。やはり、地域の力も大変重要だと思ふ。モラロジーでは先ほども言つたように、親から子へ、子から孫へと「累代教育」を勧めている。そうした教育を進め、よき国民性を次の世代へ伝えていくこともまた大切である。そして子供たちが日本に生まれてよかつた、小豆島に生まれてよかつたと思ふから思ふるようにしていくには、歴史教育も大切ではないかと思ふ。

本物の歴史は感化力を持っている。教科書は地域で選べるようになったと聞いている。ぜひ歴史を学ぶことは大切なことだとわかる教科書を地域で選び、それを使つてもらいたいと思ふ。

最後に、道徳は生涯を通して勉強していくものである。ここにいる皆さんがお手本となり、明るい小豆島を作つてもらえたらと思ふ。

[濱口千愛氏：特別支援教育について] 挨拶

私は、高3、中2、小6、小1の4人の子供を持つ母親である。保護者の立場として、小学校のPTA活動も12年になるし、学校に関わることも多いので、その時に感じたことや思つたことをお伝えしたいと思ふ。小6の娘がダウン症で安田小学校の6年生で支援学級に在籍している。支援学級には担任の先生も付いてくれているし、担任の先生の手が足

りない場合は支援員の先生が付いていて、とても手厚い支援を受けている状況である。しかし、通常学級の方に発達障害の子や授業に集中できない子がおり、そういった子の支援がなかなかできていないように感じる。例えば担任の先生が「教科書を開けてください」と言っても、なかなか教科書を開けられない子供が何人か見受けられる。その場合に担任の先生が1人1人に声かけをしていると授業が止まってしまう。そんな時に支援員の先生が横でフォローしてもらえると授業がとてもスムーズに行くような気がする。

第3回の総合教育会議の時に特別支援課の課長が言っていたように、通常学級における発達障害の可能性のある子供が6.5%というデータがある。文部科学省のホームページを見てみたが、小学校1年生から中学校3年生までの全体の平均値が大体6.5%となっているが、学年ごとに見ると小学校1年生だと9.8%、2年生だと8.2%と通常学級の1割ほどの子供たちが支援を必要としているというようなデータが出ている。

学校の先生たちもその子供に支援が必要だということはわかっているし、支援したいと思っているが、1人の力ではそこまでのことはできないところもあるように思われる。小豆島町では通級指導も行われており、1人の先生が町内の学校を週1回巡回しているが、それではなかなか支援が難しい部分もあると思う。だから、支援員をもう少し増やしてもらって、通常学級にいる支援が必要な子供にも十分な支援が受けられるような体制ができたなら有り難い。

現在の支援員も各学校にいるが、基本は保護者の要望があって、必要と認められたら支援員が付くような形であり、自分の子が障害児であることを認めたくない親もいるので、その場合支援が届かない。

そこで、最近5歳児健診が幼稚園で始まっているので、その時にある程度親への聞き取りや小児科の医師が子供の様子を見て判断するようなことがあると思う。その時点で支援が必要な子が大体どれくらいいるかわかるような気がするので、それをもとに小学校の低学年には支援をつけてもらえたらと思う。

中学校になると、思春期でもあるため、不登校やいじめの問題が起きてきている。発達障害の子がほったらかしにされたり、「なぜできないか」ということで自分のことを傷つけたり等、いじめや集団の中でなかなかうまくいかないことがあるように思う。中学校では担任の先生はいるが、教科ごとに先生も違うし、部活ごとに活動することも多いので、なかなか先生の目が行き届かず、発達障害の子にとってはしんどい環境になっている気がする。中学校でも支援員の先生が見守り支援をしていて、生徒の話し相手になったり、苦手な部分をうまく支援してくれているようだが、やはり人数的にもう少し増やしてもらいたい。

学校の方に支援員を増やして支援を増やしても先生や保護者の意識が変わっていかないとうまくいかないと思うので、保護者に対しても就学前の早い段階で発達障害のことや子供にあった教育を行うことの大切さをワークショップなどで保護者の全体に広げていければいいと思う。

また、幼稚園で気になる子供がいて、先生が検査を勧めても保護者が受け入れられないという現状もある。

町として、支援員の数や発達障害児の数の調査を行って、その上で保護者への特別支援

教育の必要性を広めてもらえれば、支援が必要な子供たちが安心して教育を受けられる環境を整えていけるのではないかと思う。

もう1点、小豆島に特別支援学校を作ろうということで「小豆島特別支援学校設立特別部会」というものを立ち上げ、イベントや勉強を行っている。

しかし、障害児を持つ保護者だけでは活動がうまくいかないため、教育委員会と連携できたらと思う。案内の発送や現職の先生への講演依頼、養護学校の見学依頼等、調整をお願いしたい。

[岡崎敏明氏：発達障害児の問題や児童虐待の原因について] 挨拶

私の場合は結婚する前にどうしたら頭のいい子ができるかと考えて、1つはオムツを1日でも早く外すこと、もう1つは乳児期から本の読み聞かせをすること、この2つのことを実行した結果、長男も次男も小豆島高校を首席で卒業した。

頭のいい子を育てるということについて、日本では何の試練もないが、結果頭のいい子を作るということは、日本の国を活性化させると私は考える。

虐待問題や発達障害、貧困問題の原因はいったい何かを考えるにあたって、減少ばかり考えて、発達障害の原因は何かということ誰も考えようとしませんが、深刻な問題として貧困児童は今16.3%、6人に1人存在する。不登校は12万人存在する。DV相談は10万件を超えた。児童虐待は88,931人を超えた。発達障害者は10人に1人存在すると言われている。エイズの患者も2003年には約8千人だったのが、2012年には約2万1千人存在すると言われている。

なぜこんなに発達障害の子が増えているのか、児童虐待が深刻になっているのかということを考えないといけないが、2005年10月13日の四国新聞の記事に『「キレる子」科学的に究明 情動5歳までに形成』と書かれている。3歳までの子育てがいかに重要かということ誰も考えようとしない。3歳までの育児が非常に人生を左右する重要な問題である。

「赤ちゃんにおむつはいらぬ」という本があるが、紙おむつは非常に便利だが、それによって母親が失ったものはなにか、また社会的にどんなに大きな損失を被ったかを考えなければならないと思う。

また、2013年7月14日の記事で発達障害の子供は10人に1人存在するといわれている。今おねしょをする子は80万人いる。2014年10月3日の新聞記事である。2015年10月19日の朝日新聞の記事によると、1990年には平均2歳4カ月でおむつが外れていたのが、2007年の平均は3歳4カ月になっている。こんなに長い間おむつを当てられた赤ちゃんが頭がよくなるはずはない。それが発達障害の原因になっていると思う。その影響に気付いてからは歴代町長に紙おむつを禁止するようお願いしてきた。町の方針として、紙おむつを禁止するようお願いする。

世界で一番安定している国は北ヨーロッパ。北ヨーロッパが安定しているのは7割以上の方が大学に行くからであり、知的水準が高い地域である。知的水準が高ければ、どのような困難も乗り越えていける。

児童福祉法で定められているが、生まれてきた全ての子供は心身ともに健やかな子供に

育つように国及び地方公共団体が親と一緒にちゃんとしないといけないが、国は関心がない。

そこで、町政として紙おむつを禁止してほしい。それが全国に波及して、これから生まれてくるすべての子供が心身ともに健やかに育つように考えてほしい。

[野村圭子氏：インターネットの影響から子どもを守るために] 挨拶

さぬきっ子安心安全ネット指導員として平成21年度から活動している。それ以前からネット上の危険なモラルについて携わってきたが、ここ数年の変化の激しさは皆さんもご承知だと思う。よくスマホを問題にされるが、スマホを持っていない子でもネットの影響を考えなければいけなくなってきた。「お下がりスマホ」の問題がある。親が使わなくなったスマホを子に与えている。そのスマホがあればインターネットで遊べる。「通信教育のタブレット」は簡単な操作で普通のスマホと同じような機能を持つことができる。また「祖父母のスマホ」、使い方がよくわからないからと言って、孫に貸し与えてしまうということがある。「携帯音楽プレーヤー」、ipod や android を搭載したウォークマンであれば、普通のスマホと同じようなことができる。「携帯ゲーム機」、船の中で子供たちがいつも遊んでいるが、ゲーム機も簡単にインターネットにつなげることができる。

危惧されることの主なものとして、まずは「友だちとのトラブル」、LINE・Twitterでのトラブル、個人情報流出などがある。

今一番心配しているのが、「身体への影響」である。電子機器を見ていると目が悪くなるのは間違いない。それと睡眠への影響、成長への影響が特に心配である。普及し始めたばかりで結果がどうなるか全く見えていない状況であるが、夜遅くまで使っていると脳の覚醒するところに影響を与えて、よく眠れなくなる。それで睡眠の質が落ちる。あと、夜遅くまでついついやってしまう、これもよくない。成長ホルモンは夜中の12時をピークとして、分泌されることがわかっている。睡眠の質が落ちると成長ホルモンの出がよくなって、小さい子供や小・中・高校生に悪影響を与えることが推測される。

子供が小さい時に夜寝る前にテレビを見せないで、読み聞かせをして眠りましょうと子育ての時に私も取り掛かっていたが、テレビを見ると光で脳が覚醒されて、眠れなくなるというのは、その時はあまり言われてなかったが、子育てをする人は感覚でわかっていた。それがここに来てスマホを使うことで覚醒されるということがかなりはっきりとわかってきた。曇り空でうつが発生するという病気があるそうだが、曇り空によるうつの場合、強い光を当てて、脳を覚醒させるという治療法があるそうだ。それと同じような光を子供たちがスマホやゲーム機などによって目から常時取り入れているといってもおかしくない状況であるので、とてもよくないことだと思う。こういう情報を私たち指導員が学校や幼稚園でお話ししているが、子供を取り巻く全ての人にも知ってもらいたい。

色々と事件を取り沙汰されているが、この島でも電波が届いている限りはいつ何が起ってもおかしくない。今年の2月にも東讃地区で女子高校生が大阪からきた男に連れ去られるというネット上の事件もあった。小豆島にもたくさんの人が入ってきている。地域に知らない人がいてもおかしくない。

では、使わせなければいいではないかと言うが、学校の現場でもタブレット教育が始ま

っている状況であるし、通信教育でも大手ではタブレットを無料で渡す時代である。そんな時に子供たちをデジタル機器や通信機器から離すのは不可能に近い。

どのように使うかということのを考慮に入れて、段階に応じて学んでいくことが大切だと思う。

興味深いのが、今年文科省が発表した調査の結果で、中学三年生の場合、全くスマホを使わない子供よりも、1時間ほど使う子供の方が成績がいいという結果が出ている。なぜかという、自立の心で1時間以内にセーブできるという心の強さがあれば成績もよくなるということである。

そのように、使い方によっては、とても便利な物で、この先必ず必要となってくるものである、上手に使う、上手に付き合うことが大切だと思う。

香川県の教育委員会では「さぬきっ子の約束」というスマホのルールを作って、夜9時以降は使わないように指導してはいるが、なかなか守られていないと聞いている。

子供たちが健康に育っていくために子供や家庭、地域の方々にネットについて知ってもらいたいと思う。

[塩田町長]

ありがとうございました。それでは教育委員の皆さんからご意見・ご質問をお願いします。

[後藤教育長]

濱口さんから教育委員会へのお願いということで、案内等特別支援学校の件については教育委員会で対応させてもらう。

特別教育支援員については、現在小豆島町内で21名いる。20名を定員と考えており、特別支援学級の生徒だけでなく、発達障害の子供等にも対応するようにしている。支援員に対して研修会を年1回行っているものを年2回にしようかと思っている。

また、特別支援学校の設立については教育委員会としても郡の校長会の時に校長先生に対して説明しており、学校の先生も協力するようにと伝えている。

[塩田町長]

支援員は1つの学校あたり何人いるか。

[後藤教育長]

学校によって1人～4人、対象者の数によって違う。

[塩田町長]

小豆島町で20人という根拠は何か。

[後藤教育長]

学校に私や指導主事が見に行ったり、5歳児健診を利用して支援が必要な子供の数を調査している。

[塩田町長]

調査の結果、対象者が増えると支援員を増やしていこうという考えか。

[後藤教育長]

それが最善だと思う。

[熊坂委員]

学校の教育で大切なこととは、子供を健全に育てるということに尽きる。障害を持った子も含めて、強い子も弱い子もできるだけ健全に豊かな心を持った子に育てていくことが非常に大切なことだと思っている。そういう意味で照下さんが行っているような論語の読み聞かせ等も学校の授業の中ではできないことを地域の方々に応援していただいて広めていく、これも大切なことだと思う。同時に我々大人の方も様々な勉強をする機会をもっと作るべきではないかという感じはする。子供の教育はすなわち大人の教育かなということも考えていく必要があるのではないか。

[岡田委員]

不易と流行というもの、絶対に教えなければいけないことはきちんと教える。そして良いことをしたときには褒める。厳しく叱るけどもあとでフォローする時間が職員には必要でないかと思う。そして、今日あったことを必ずお家へ連絡する。

私が現職を退いて、不登校の子の世話を4年ほどしていた時に、家庭との連携が大変であるが、ひと月に1回は保護者と話をする日を作っていた。3～4時間ほどでそれぞれが考えていることを発散する「若竹教室」という場で家庭ぐるみで携わってきたので、カウンセラーの話もよくわかる。

また、私が子育てしている時には紙おむつはなかった。保育所の先生に尋ねるが、おむつが外れている年齢としては何歳ほどであるか。

[大岡内海保育所長]

内海保育所では座ることが可能になった0歳児から、定期的に時間を決めておまるに座るよう促すことで、先生が排尿の感覚をつかむ。今、1歳児10名のうち、半分ほどは日常はトレーニングパンツで過ごしている。お昼寝の時もパンツで寝ている子も何人かいる。2歳児はほとんどの子供がトレーニングパンツまたは普通のパンツで過ごしている。排泄の自立は家庭から幼稚園に来た子供よりも保育所から上がった子供の方が自立ができていると思う。ただ、土日をはさむと元に戻ることがあり、家庭との連携で足踏みすることはある。

[黒木委員]

子供を取り巻く環境は私たちが子供の頃と比べて悪くなっている感じがする。こういう状況の中であるので、家庭・学校・地域がもっともっと情報の交換、連携を取って、意志

の疎通を図りながら、子供を教育していかないといけない。そういう中で家庭においては、最近では親子のコミュニケーションが不足しているのではないか。家では父親はパソコンに向かっているとか、母親はスマホを持ってメールのやり取りをしているとか、子供は子供でゲームを触っているという状況が増えているのではないかと思うので、子供と親とが家庭で十分会話をするという時間が非常に大事でないかなと思う。

また、女性が妊娠した時から、母親は子供を育てるにはこういうことをしないとイケないということをお教える必要があると思う。母親になる本人と地域の機関が危機意識を持って母親の教育をしていく必要があるのではないかなと思う。

[岡本委員]

私も子育て中の親で、親の責任の自覚であるとか親の判断が独占的でないのかとか、子供の多様性を認めるべきだと言われた時には耳が痛かった。

ただ、小学生の親というと30歳も過ぎて人間形成がとっくにできているような状態があるので、こうしなさい、ああしなさいと言ってもなかなか思い通りにはならないと思うが、親と地域が連携して、社会の中で個人がどのような立ち振る舞いをしたらいいのかということをお教える教育機会がどんどんできればと思う。

また、スマホについて、最初から家庭の中でルールを決めることが必要であると感じた。

[塩田町長]

岡さんは土庄町でスクールソーシャルワーカーをされているとのことだが、どういった仕事であるか。

[岡氏]

子供が生き生きと生きられるようにというところにベースを置いているが、発達に課題を抱えたお子さんたちの学校適応のフォローを家庭や学校の先生や地域の人と支えている。

[塩田町長]

土庄町の教育委員会にはスクールソーシャルワーカーが何人いるか。

[岡氏]

スクールソーシャルワーカーは1人。

[塩田町長]

小豆島町にはいるのか。どういう方がどういう仕事をしているか。

[後藤教育長]

スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーと2つあるが、スクールカウンセラーは県からの派遣で、各保護者や子供との面談があって、それに対して指導、アドバイ

スをしている。スクールソーシャルワーカーは家庭の中に入って行って、父母の相談に乗ったりするものである。現在小豆島町には1人いる。

[塩田町長]

その方はこういった経験をお持ちの方か。

[後藤教育長]

心理学等を勉強された方で、県からの派遣で、月に何回か来る。

[塩田町長]

子供たちがたくさんの問題を抱えているし、学校の置かれている環境も昔と違ってとても大変だという話が続いており、学校や先生へのバックアップ体制が必要だと思うが、教育委員会はどのように考えているか。

[後藤教育長]

学校の先生や校長先生のバックアップということで、今年から指導室長を置いて、指導主事が学校の先生の相談に乗っている。

[塩田町長]

とてもいいことだが、先生方の負担が減るという話ではない。実際に問題を抱えているのは子供であって、子供1人1人に寄り添って応援できないといけない。

子供たちを応援するために、先生の他に何人も専門のスタッフがいるとう問題提起がされていたように思う。

[後藤教育長]

確かに取り巻く環境は厳しくなっているので、ソーシャルワーカーや健康づくり福祉課の職員が家庭訪問をして相談に乗ったり、スクールカウンセラー、指導主事が子供のところに行って指導したりということを行っている。

[塩田町長]

どういう体制にすれば良いか。

[後藤教育長]

やはり専門のスタッフが必要である。例えばスクールソーシャルワーカーが常駐して、すぐ対応できるような状況であれば、多くの場合は学校の先生だけが抱えるのではなく、負担を半減できる気がする。

[塩田町長]

せっかく総合教育会議を作って、色々な人に来ていただいて、問題提起をしてもらうので、問題提起されたことについて、具体的にこういう答えを持って来年度対応するという場にしないといけない。教育委員会や教育委員は教育サイドからこういうことが必要だということを書いてほしい。

[後藤教育長]

浅尾さんというソーシャルワーカーを町で1人雇っている。現在は月に何回かであるが、常駐できるような方がいれば、各小中学校の問題もかなり解決するのではないかと思う。

[塩田町長]

校長先生からご意見を。

[岩澤小豆島高等学校校長]

発達障害に関して、基本的には学校にスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの方が常駐していれば、学校現場としては助かる。生徒だけでなく教員に対してもスクールカウンセラーに色々な相談にのっていただく。またスクールソーシャルワーカーは学校内よりも対外的に色々な関係機関とのつながりの仕事をしていただけるので、財政的に問題なければ各学校に1名配置が学校現場としては有り難い。

[小玉小豆島中学校校長]

2名のスクールカウンセラーがほぼ週1回来てくれているので有り難い。県内では月2回であるとか、2名も付いている学校は少ないのではないかと思う。予算があるのであれば、常駐してもらえる方がいれば助かる。浅尾先生は家庭訪問をしてくれており、不登校の子供がここ最近動けるようになってきている。ぜひ常駐の方向で検討をお願いする。

それと、親子の関係が崩れているところは子供が学校に来にくいというのがある。それは世代をつなげる、家庭教育が連鎖していくというのを実感している。1番は感謝の気持ちが親子で伝えられていないのではないかと思う。

[片山池田小学校校長]

不登校について、毎日2回3回と家庭訪問している状況がある。そういった中でソーシャルワーカーの方に一緒に来ていただき手助けしてもらうことがすごく大切なところである。

また、教員が自分の目の前の子供たちの教育に専念できるためには、色々な人に助けていただくという考え方も大切なことではないかと思う。

それと、道徳教育とは生き方の教育ではないかと思う。道徳の時間に色々な価値に照らし合わせて自分を見つめなおす時間をしっかりと確保していくことが子供の特性を育てるということにつながっていくと思っている。

[羽座星城小学校校長]

スクールソーシャルワーカーの浅尾先生に月1回来てもらっているが、その1回が待ち遠しいぐらいであるので、回数を増やせるようであれば大変有り難い。

本校の子供は自己肯定感や自己有用感が非常に低くて、色々と手立てはしているが、なかなか効果が上がらず困っていたところで、ある会で小学校の高学年になるともう遅いというような話を聞いたことがあるが、岡さんいかがか。

[岡氏]

基本的にやり直しはいつからでもできると思っている。子供の育ちというのは連続的で終わりが無いが、小さければ小さいほど、若ければ若いほど可塑性は高い。

[三浦安田小学校校長]

3年前、県の事業で小中の連携のためにソーシャルワーカーとカウンセラーを配置してもらい、非常に効果があったが、1年で終わった。そういったいい事業をどんどん続けていけばよいと思う。

もう1点道徳教育について、今月号のモラロジーで、私たち大人が範を示さないと子供はよくなれないと書かれていたが、そういった意味で照下さんがおっしゃった、先生たちが明るい挨拶ができていないという点は耳が痛い。職員に十分伝えておく。

[川井苗羽小学校校長]

カウンセラーは利用頻度が高く、待ってもらう状況であるが、小豆島町では中学校の時間をやりくりして柔軟に対応してくれているおかげでずいぶん解消できているのではないかと思う。不足はしているがこの方向で願います。

特別支援教育について、県下の情報を集めたところ、小豆島町の特別支援教育は大変進んでいるという評価をもらっている。事例として5歳児健診であるが、小学校の入学時までには情報交換会というのもあり、その場で支援が必要な子供の状況を知って、対応を一緒に考えていくというような会である。そこで幼稚園の段階ではあまり問題にならないことでも小学校期に入った途端に問題になるようなことを事前に交流することで子供たちの困り感を減らしていくというようなことが実際に何例もできている。

校区内の情報交換会もあり、幼稚園に参観に行き、子供達の様子を実際に見て、情報交換をしたり、逆に幼稚園の先生が小学校に参観に来ることもある。非常に良い取り組みだと思う。

それと、学校を助けるという意味で教育委員会が決まりきった指導でなく、指導に行き詰った教員がいる場合はすぐに様子を見に来てくれ、その先生を助けることで子供を育てるという姿勢を持ってきている。何度も時間が許す限り支援をしてくれるので、問題が大きくなる前に子供たちが救われる。またその先生が育つといったような事例も何例もあった。今では体育指導主事、指導主事、指導室長といった色々な人が柔軟に、フラットに学校に来てくれ、教育委員会が指導・監督するという立場だけでなく、学校に寄り添って、学校のために何ができるかということをも考えてくれることを思っている。この

ような姿勢は他の郡市の校長に話すと羨ましがられる。

また、小豆島にも高松養護の分室もあるので、そういったセンター機能を生かして、学校としても呼んだりしている。予算は厳しいが、予算内でも色々と動けるのではないかと考えている。その1つとしてボランティアの活用というのがある。本校でも色々なボランティアの方に来ていただいております、業務が改善するという面もあるが、子供たちが色々な人と接することで、伸びていく。先生たちでは補えない専門性も地域のボランティアからいただくこともある。そのような多様な形で教育を支えてくれているという点では小豆島町はかなり進んでいると私自身は思っている。

[塩田町長]

ありがとうございました。教育長から総括的な意見を。

[後藤教育長]

再度、特別支援員については、現場の立場に立って考えていきたいと思う。スクールカウンセラー等についても考えていく。

[塩田町長]

今回は、12月24日13時半からこの場所で行う。

今日は6人の皆様ありがとうございました。